

鉢もののやさしい土づくり

○鉢土の特徴

植木鉢やプランター（植木函）などで植物を育てる場合、庭に植えるのと違って、育てる土に限られます。また庭植えと違って、ほとんど毎日水やりをしなければなりません。水をかけるたびに土は固まって行くので、水はけは悪くなり、土中のすき間に保たれていた酸素もなくなって、根は呼吸ができなくなり、その結果育ちが悪くなります。庭の木をそのまま鉢に入れて使ったのでは、けっしてよい育ち方はいたしません。

○よい鉢土とは

よい鉢土とは、水はけがよく、しかも水もちもよく、通気性がよいという最少限三つの条件が備わってなければなりません。そこで古くから、菊鉢の土は……、アサガオの土は……、といった具合に、土と腐葉、川砂の三つを配合してそれぞれの植物に適した鉢土作りをしているわけです。鉢土のことを、配合土とか培養土とか呼ぶのはこのためです。

たいていの鉢植えに適した鉢土の配合は、容量で土4、腐葉4、川砂2の割合です。腐葉の役目は水もちをよくすることと、鉢土の粒を大きくして、土と土の間にすきまを作り、その間隙に水や空気（酸素）を保たせることです。このような状態の土にすることを「団粒組織の土にする」といいます。

川砂は水はけをよくするためです。腐葉の役目は、前記のとおり土の改良にあるわけで、同じ役目を果たすものならば腐葉に限らず他のものでもよいわけです。ジョウロで水をかけたときに鉢土によくしみ込み、余分な水が鉢底からすみやかに抜ける状態になるのを、鉢土の目安にしましょう。

○庭の土を使うときは

庭木を使うときは、まずよく耕して雑草や雑草の根をとり除き、6mmのフルイでふるった土を作ります。この土に腐葉（土の改良材）と川砂を前記の割合でまぜ合わせます。一般に庭土は磷酸不足ですから、あらかじめ磷酸を先に土に与えておき、その後肥料を与えるように

します。この土に吸わせる磷酸は市販の過磷酸石灰がよく、4、5号鉢一杯分の土に、大きじすりきり一杯をよくまぜて下さい。特に新しい土の場合はこの方法を実行しないと、鉢土として十分の配合土や培養土を使った場合でも、育ちがよくありません。

○売っている土の使い方

バラの土、アサガオの土、シャボテンの土などと花の種類別の名のついた用土や、配合土として売っているものは別として、単に赤土とか黒土といって袋につめて売っている土は畑の土を6mmのフルイに通しただけの状態です。これは前述の底土をふるったものと同じです。ですからこの土には川砂や腐葉を配合しなければなりません。

○古い鉢土を再度使うには

土のないところに住んでいると、土は非常に貴重なものです。鉢から出した土をよくほごして、前に育っていた古い根や枯れ葉をよく取り除きます。次に土に病菌などがあるので、鉄板の上で焼くか、蒸し器で十分にふかします。また熱湯を十分かけるのも一方法です。長い間鉢土として使われていた土は団粒組織がくずれて、土の構造がこまかくなり、水はけが悪くなっているのです。腐葉と川砂を前述のとおりまぜますと再び立派な鉢土として使えます。

○土をよくする材料（土壌改良材）

鉢土を作るときの腐葉は肥料でなく土をよくする材料ですから、同じ効果があれば他のものでもよいわけです。その目的で市販されているものに、ピートモス、パーライト（ネニサンソ）、パーミキュライトなどがあります。また身近にある藁やコモ、縄くずなどの有機物を使って改良することも出来ます。山や庭の落ち葉を集めてきて堆積し水をかけて踏みかため古ビニール等をかけておくと早く腐ります。近くに水田のあるところでは、もみ殻も入手していぶし、もみ殻煙炭を作って、これを土にまぜてもよい。鉢もの栽培成功の鍵は土作りにあります。

自給飼料を増産しましょう